

## 写本『魯齊亞國睡夢談』について

### CONCERNING THE MANUSCRIPT “OROSHIAKOKU SUIMUDAN”

生 田 美智子\*

The manuscript “Oroshiakoku Suimudan,” whose composition is hypothetically dated in 1794, is a record of castaways from Ise who were cast ashore in Russia during the period of Japanese isolation. After a decade of wandering around Russia, they were returned by the Russian embassy to Japan. A photographic reproduction of the Japanese text of the manuscript was published in Russia in 1961 with translation, notes and commentary by V.M. Konstantinov. However, in Japan its existence has been forgotten. It has not been listed in either of the major bibliographical collections, *Kokusho Sômokuroku* or *Kotenseki Sôgô Mokuroku*. In Russia as well, it has become a forgotten book while translation of Inoue Yasushi’s “*Oroshiyakoku Suimutan*,” whose title seems to be inspired by it, is famous and has been filmed.

Contained in this manuscript is exceedingly interesting informa-

---

\*IKUTA Michiko 大阪外国語大学大学院修了。大阪外国語大学ならびに京都大学講師。論文に「異文化の翻訳と記述－『北槎聞略』より」（ロシア、ソヴェート文学研究会『むうざ』第13号）などがある。

tion illustrating the drama of contact with a foreign culture during the period of Japanese isolation. This manuscript, as can be ascertained from its title, preface and style, was not written at the behest of the bakufu or any feudal lord. For that reason the anonymous author was able to deal freely with his material.

In this paper I would first like to clarify how this manuscript made its way to Russia and was subsequently published in reproduction and, second to describe the kind of experience it records.

## 1 はじめに

写本『魯齊亞國睡夢談』は伊勢漂流民の記録である。この写本は、ロシアでは1961年にコンスタンチーノフによりロシア語訳と解説、注釈が施され、影印出版されている。だが日本では現在に至るも、『国書総目録』、『古典籍総合目録』、『日本北辺関係旧記目録（北海道・樺太・千島・ロシア）』<sup>1)</sup>にも記載されない忘れられた存在である。

この書は、幕命や藩命により書かれたものではない。匿名の著者が自らの執筆意図に従い、伝達しておきたいことを自由に記録している点に特異性がある。

本報告では、第一に、どのような経緯でこの写本がロシアに渡り、影印出版されるに至ったかを明らかにし、第二に、この書からどのような新たな世界が見えてくるか明らかにしてみたい。

## 2 影印出版の経緯

日本人の多くがその存在に気づいていない江戸時代の写本『魯齊亞國睡夢談』は、一体どうしてロシアで影印出版されることになったのか。

影印本の巻頭にあるコンスタンチーノフの日本語序文によれば入手経路は以下の通りである。

この写本は約五十年前にウラジオストーク東洋学院イエ・ゲ・スバル

ヴィン教授が日本京都滞在中に古書店で購入し、ロシアに持帰ったもので、当学院の改組後レーニン図書館の所蔵に帰した。<sup>2)</sup>

スパルヴィンは、ペテルブルグ大学の東洋学部を卒業後、日本語講座の教授候補として日本に留学したが、新設のウラジオストーク東洋学院（現極東大学）の日本語科に引き抜かれた人物である。スパルヴィンは東京外国語学校（現東京外国語大学）の露語科で教えたこともあり、二葉亭四迷とも交際があった。『横目で見た日本』の著者として日本でも知られている。スパルヴィンが京都に滞在した時期は、グリゴルツェーヴィッチにより1906－1907年であったことが判明しているので、写本購入もこの頃であったと思われる。<sup>3)</sup>

その後東洋学院は閉鎖され、写本はレーニン図書館（現ロシア国立図書館）に移された。スパルヴィンが古本屋で入手して以来約半世紀間、写本は研究対象となることもなく、引用されることすらなかった。それが世に出ようになったのはコンスタンチーフがレーニン図書館でこれを発見し、露訳と評論、解説を施し、日本語の原文を影印公刊したことによる。

京都の古本屋におけるスパルヴィンの写本発見と、レーニン図書館におけるコンスタンチーフによる写本の発見、この二つの発見が『魯齊亞國睡夢談』を世に出した要因といえる。

時代も幸いしていた。収益を度外視できる体制でなければ、ひとにぎりの日本研究家しか解説できない写本が影印出版できるはずはなかった。当時の東洋学研究所所長は、スターリン批判のとばっちりでタジキスタン共産党第一書記を解任されたガフーロフである。研究者以外の人が所長になったのは前代未聞であったが、畑違いの閑職に追いやられたこの人物は意外な手腕を発揮する。共産党内のパイプを利用し、東洋学研究所で一挙に二つの原文シリーズを刊行することに成功したのである。1959年から刊行された『東洋諸民族古書拾遺原文小型シリーズ』と『東洋諸民族古書拾遺原文大型シリーズ』である。前者は翻訳、評論、解説をつけて原文を影印公刊したもので、後者は序文のみを添え

て原文を影印公刊したものである。ちなみに1961年には小型シリーズではコンスタンチーノフが『魯齊亞國睡夢談』を、大型シリーズではゴレグリヤドが『環海異聞卷之八 言語』を影印出版している。

フルシチョフ時代はブレジネフの停滞期とは違って、アカデミズムが自由に活動した時期であり、百花繚乱の観があった。日本に対しても文化的積極外交が展開され、近藤忠義がモスクワ大学で日本文学の講義をし、大江健三郎の講演も行われた。国際東洋学会には吉川幸次郎や井上清が招待された。竹取物語、宇津保物語、狂言、俳句、好色本、近松門左衛門などの翻訳や研究が積極的におこなわれ、<sup>4)</sup> 露和辞典や和露辞典の出版も準備された。日本研究がさまざまな領域において盛んになったのである。

そのような時代の気運を表すかのように、コンスタンチーノフは序文で次のように述べている。

校訂者は此度ソ連において所蔵されている古書『魯齊亞國睡夢談』の原文とともにその露訳およびそれに関する評論、解説を上梓してもってソ連の国民および政府が熱望しているソ日親善にいささか貢献せんと冀うものである。<sup>5)</sup>

コンスタンチーノフはソ日親善に貢献したいと言った。実はコンスタンチーノフはレーニン図書館で三冊の写本を発見したのである。『魯齊亞國睡夢談』、『環海異聞』、『番談』である。<sup>6)</sup> その中から彼はソ日親善に貢献すべく、伊勢の漂流民の記録である『魯齊亞國睡夢談』を選択した。なぜ、『魯齊亞國睡夢談』が選ばれなければならなかったのだろう。

これには二つの要因が考えられる。第一は、国家の対外政策に翻弄されたコンスタンチーノフ自身の運命である。コンスタンチーノフが、日本側スパイの嫌疑で、逮捕され、死刑を宣告されたのは1936年のことであった。日本に滞在した(1927-33年)ことが災いしたのだった。傑出した日本語能力のおかげで



死刑は免れたものの、特殊監獄で日本軍の機密文書の解読を余儀なくされていた。名誉が回復され、完全に自由の身になれたのは1956年のことであった。それからは遅れを取り戻すかのような猛烈な仕事ぶりだったが、1964年64歳で他界する。<sup>7)</sup> 生涯の軌跡を振り返ると、自由に仕事のできた短い期間を光太夫に捧げていたことが分かる。1974年には彼が741もの綿密な註をほどこした『北槎聞略』の翻訳が死後出版される。<sup>8)</sup> 光太夫へのこだわりは、情報鎖国の世に外の世界を見てしまった自らの悲劇と光太夫の運命を重ね合わせていたからだろう。

第二の要因は『魯齊亞國睡夢談』が日露関係において果たした役割である。江戸時代には、大部分の人はロシアを知らなかった。それが、突如ロシアが国家的規模で日本に関わってくることになる。1792年根室にロシアの黒船が突然姿を現したからである。ラクスマン遣日ロシア使節は、交渉のカードとして、光太夫たち3人の漂流民と通商を求める親書および献上品をもっていた。しかも「江戸まで直に出、江戸御役人へわたし可申」<sup>9)</sup>と松前藩に伝達したのであった。ロシアは、当時の日本にとり、外交関係がなく、宗教、文化の異なる「赤蝦夷」の国というだけではなかった。1739年以来の度重なるロシア船の出没、1771年ベニョフスキ警告事件（ハンガリー生まれの軍人ベニョフスキがロシアの日本侵略を警告する手紙をオランダ商館長宛に送った事件）などにより、ロシアは「北方の脅威」と意識されるようになっていた。

『赤蝦夷風説考』、『三國通覧図説』、『海国兵談』はロシアの衝撃に対する知識人の反応であった。ところが光太夫のロシア体験談と来日したロシア人が示したロシアの実像は、北辺の脅威により醸成されたロシアのイメージを転回させることになる。本多利明はロシアの繁栄をエカテリーナの大徳の驗しといい、熱いまなざしを注ぐ。<sup>10)</sup> 光太夫以前のロシア像はオランダを媒介するものであった。第三国の情報に媒介されない日露最初の文化接触の記録を翻訳することで、コンスタンチーノフは、高揚しつつあった日露友好関係の原点を示しておきたかったのだろう。

### 3 『魯齊亞國睡夢談』—情報伝達回路としての夢—

『魯齊亞國睡夢談』は光太夫関係の記録のひとつである。描写対象は奇跡の生還をはたした光太夫であり、それを送り届けたロシアであり、ロシア人である。

この書の特徴は、『魯齊亞國睡夢談』という表題に端的に表われている。類書の表題は、光太夫や磯吉の名を冠したものや、漂流地名を付した実録物がほとんどである。しかも著者は匿名である。このことは著者の構想がいかなるところにあるかを暗示している。ロシア情報という対象と、名をなのらない著者の性格が、この書にどのような展開をもたらしたのか見てみよう。

全体は5巻にわかれ、それぞれに小見出しがついている。巻頭の目次により、それを紹介すると、次の通りである。(かっこの中の説明は生田による。)

#### 魯齊亞國睡夢談 惣目録

卷之壺 一山川輿地全略之図 (1枚)

一魯西亜國人物之図 (6枚)

一同船之図 (1枚)

一神昌丸出船難風に逢ふ事 並 漂流アミシイツカエ着岸之事

卷之貳 一幸太夫 小市 磯吉所々江渡ムスコヒヤへ着事 並 女帝へ目見帰朝願ひの事

一三人の漂流人帰国の事 並 蝦夷江着船小市死亡の事

卷之三 一公儀様より御送物目録之事 並 ヲロシヤエ御申渡し之事

一小市の衣ふく法聖寺へ納りし事 並 衣装器物目録書之事

卷之四 一吹上御もの見之図 (1枚) 並 幸太夫 磯吉之像 (1枚)

一漂流人御上説の事 並 幸太夫 磯吉異国もの語の事

卷之五 一船頭幸太夫 磯吉御褒美の事 並 兩人蒙御仁恵安堵の事

一見して分かる通り、「神昌丸出船難風に逢ふ事」で始まり、「船頭幸太夫

磯吉御褒美の事 並 兩人蒙御仁恵安堵の事」で終わる〈漂流譚〉である。漂流者が無事生還、褒美をもらうという安定した形で幕を閉じるかのようなのである。内容と文体を仔細に見ると、三部構成の作とみなすことができる。

第一部は、光太夫<sup>11)</sup>たちの漂流と帰還を描いた〈冒険譚〉で、巻之壺と巻之式がこれに当たる。回想と伝聞の文体を用いた聞き書き形式を用い、エピソードを時間軸に沿って列挙する方式により、3人称で書かれている。「いつ、何処で、誰がどうした」という事件の展開に主眼をおいた語り口が用いられている。

第二部は、いわば〈ラクスマン来航事件資料集〉で、公儀から使節への下賜品のリスト、宣諭使の石川将監と村上大学からの下賜品のリスト、松前からの下賜品のリスト、信牌（長崎入港許可書）といった日本側の資料が提示され、巻之三がこれに相当する。幕府の公文書の写しをそのまま挿入した完全なドキュメント形式である。

第三部は、將軍徳川家斉上覧のもとでの〈光太夫と磯吉の尋問記録〉で、尋問とそれに対する返答の連続である。巻之四と巻之五がこれに相当している。『漂民御覧之記』として、従来から日本でも知られている部分である。質問に対し、漂流民がかしこまって答えるさまが直接話法を用いて、いきいきと活写されている。

『魯齊亞國睡夢談』巻之壺には、次のような序文がついている。物語全体の巻頭ではなく、惣目録と巻之壺の小見出しとイラスト8枚の次に配置されている。

#### ヲロシア讀様

一 ロシア  
魯齊亞國 ラクサマ  
一 二 三 四 但日本ヨリ一万八千余里 尤六丁一里也

右之通一二三ト印之通りヨムベシ 是 夷国之習ヒニテ 下ヨリヨムナリ。

細字で注記されているのは日露の距離であるが、この隔たりを『坤輿図識』は「我奥蝦夷諸島ノ地ト、一衣帯水ヲ隔ルノミ」<sup>12)</sup>と表現している。ロシアの文献では次のように表現されている。「朝鮮半島は……ロシアから七〇〇露里離れている最初の日本の島々のあたりまで延びている。……この島々から日本までは一〇〇〇露里ある。」<sup>13)</sup>それがここでは「日本ヨリ一万八千余里 尤六丁一里也」となっている。メートル換算すれば約11781キロメートルになる。赤道の全周が約40077キロメートルなので、地球全周の四分の一以上に相当する。どこからどこまでの距離かは明記されていない。だがでたらめな数値ではない。『北槎聞略』に光太夫の行程が数字を駆使した方法で克明に書いてあるが、そこにあげてあるペテルブルグ、イルクーツク、ヤクーツク、オホーツク、根室の間の距離を順次加算すると、11302露里になる。これをメートル換算すれば、約12057キロメートルとなり、ほぼこの数値が得られる。『北槎聞略』は光太夫が越えてきたオホーツク・根室の海路を1980露里（2112キロ）と記している。日露の距離を表現する際の当時の慣例であったこの数値を採用せず、日露の隔たりを、「一万八千余里」と表現する序文は、実際に踏破した距離を示しつつ、同時に夢空間への旅立ちを用意する著者の姿勢を象徴している。

次に、「ヨロシア讀様」であるが、「夷国之習ヒニテ下ヨリヨムナリ」と突飛なことを言っている。ロシアでは文字は左から右に読む。『北槎聞略』でも、「総て欧羅巴諸国の文字は左行横文にて、左を字頭にして右の方へ横に連綿して書なり」<sup>14)</sup>となっている。近世の百科事典『和漢三才図会 卷第十四』でも横文字を用いる異国人の存在は知られていた。このような奇妙な但し書きをつけたのはなぜか。

この部分だけを見ていたのでは分らないが、当時の他のテキストと照らし合わせると、その意味が浮かび上がってくる。

『蘭学事始』は、文化12年（1815年）、当時83才の杉田玄白が蘭学創始の思い出を綴ったものであるが、当時の状況について、こんなことを言っている。

然れどもその頃はわけて常人の漫（みだ）りに横文字を取扱ふことは遠慮せしことなり。すでにその頃本草家と呼ばれし後藤梨春といへる男、和蘭事の見聞せしを書き集め、紅毛談という仮名書の小冊を著し、開板（かいはん）せしに、その内にかの二十五文字を彫り入れしを、何方よりか咎めを受け、絶板となりたることもあり。<sup>15)</sup>

『紅毛談』絶板の表向きの理由は横文字を入れたからであった。この事情を視野にいれると、『魯齊亞國睡夢談』の著者が横文字をさけた理由が理解できる。幕府から咎めを受けることを警戒したのだろう。

しかもそれを逆手に利用して、「<sup>ロシア</sup>魯齊亞國」に「二三四」と読み方の順序を示す記号をつけ、「<sup>ア</sup>亞魯齊國」と下から読ませている。ロシア語の[ r ]は振動音である。[ r ] が語頭にくると、日本人の耳には添頭音がついているかのように聞こえる。例えば『北槎聞略』では[ r ] ではじまる単語を記述するのに、[ r ] の前に実際にはない母音を補った表記が数多く観察される。例えば、pak [rak] は「アラッカ（蟹）」と表記されている。漢文の返り点まがいの記号は、「魯齊亞國」の表記をいかしたまま、原音を伝えようとした工夫であったといつてよい。

このような現実の発音を伝えようとする姿勢とはうらはらに、序文は後半部になると、記述は非現実の様相を帯びてくる。

一 此書ハ夢中ノキキ書ナレバ前後聞テ<sup>16)</sup> カヒモ有覽処ハ夢中之嘶ト見テ是ヲセムカル事ナカレ

序文は、この嘶は夢中の聞き書きなので、いい加減なところがあっても責めないでほしいと言っているように読める。いや、そのようにしか読めない。どうしてこのような奇妙なことを書いたのか。

その理由を探るには、序文が作用している巻之壺と巻之式の内容を検討する

必要がある。<sup>17)</sup>『北槎聞略』の内容と比較すると、＜冒険譚＞は史実とは整合しない部分があることが分かる。写本の際の偶然の間違いもあるかもしれない。だが、それ以上に、夢の中の聞き書きであることを強調するための著者の意図的操作によるところが大きいと見るべきだろう。以下、それを見てみよう。

第一は、固有名詞や人間関係を変更したことである。光太夫が幸太夫になっているのは、光太夫自身両方の書き方を用いているからだだろう。だが、類書では「しんしょうまる」と読まれている船名「神昌丸」に「かみやすまる」とルビがふられている。また、蘭学者の中川淳庵は山中淳庵になっている。遣日使節のアダム・ラクスマンはキリル・ラクスマンの息子であるが、親子関係が逆になっている。しかもアダムは初来日であったのに、医師として過去に来日し、山中（中川）淳庵や桂川甫周の知己であったことになっている。17人いた漂流民は、12人になっている。またエカテリーナ女帝に直訴するために上京したのは光太夫1人であるが、光太夫、磯吉、小市の3人が上京したことになっている。ロシアにある大石矢の口径も大人が寝て手を延ばしても届かない位であるのが、中で立っても届かない大きさになっている。これらの誤りを仔細に見れば、一過性の事実集中し、ロシアそのものを知るにはさほど妨げにはならないことに気づく。しかもこれらの誤りは、巻之壺と巻之式に集中しており、巻之四と巻之五の『漂民御覧之記』の部分で正しい情報が今一度提示される。発禁処分になった小説仕立ての漂流記『南瓢記』で固有名詞が操作された様に、夢の聞き書き故の間違いであることを装うための著者の仕掛けだろう。

第二は、遭難した日付であるが、実際には天明2年12月13日であるのに、天明元年12月13日になっている。これはロシアから日本への帰路に要する日数を史実の約20倍に拡大したのに、帰還の日付を史実通りにしたので、遭難の日付を一年前にずらし、時間的な調節をしたものと思われる。

第三は、ロシア世界との出会いがカムチャツカまで引き延ばされていることである。光太夫たちが最初にロシア人に出会ったのは、初めて漂着したアムトカ島（アリューシャン列島のひとつ）であった。ここはロシアの植民地で、

彼らは異民族同士がせめぎあう空間に放り込まれたのである。ロシア人との出会いがより遠隔の地まで先送りされているのは、序文でロシアを万里の外の夢空間として提示したのと無関係ではないだろう。

第四は、漂流民を送り届けるエカテリーナ号のロシア出帆の日付が亥の2月になっているのである。ロシアでは9月以降船を出すことはなかった。途中で海が凍結して立ち往生するからである。光太夫はロシアの冬を知っているので、海が凍結している2月に出発したと証言するわけがない。日本到着は日付（陰暦子年9月3日）まで史実にあわせていることから考えて、著者が故意に2月にしたと考えるのが妥当だろう。

第五は、日本帰還に要した日数である。ラクスマンの『航海日誌』によれば、エカテリーナ号は26日間で北海道に到着している。<sup>18)</sup> それが19ヶ月間に引き延ばされている。鎖国時代は、遠洋航海は御法度で、地方航法（陸影を見ながら航行）が採用されていた。江戸のパラダイムでは、19ヶ月の日数を要する距離は航行不可能な隔たりとして意識されたと思われる。夢の国から帰還するため越境しなければならない隔たりである。

第六は、物語全体の巻末に公儀から亀山藩主（光太夫の領主）に宛てた書状を置いたことである。＜光太夫と磯吉の尋問調査＞の終わりでもあり、物語全体の最終巻でもある巻之五は次の様に終わる。質問に一点のよどみもなく答える光太夫に將軍をはじめ諸侯は感心、褒美を与え、一生安堵の沙汰を出し、妻子も呼び迎えてよいとの旨を申しわたす。艱難をしのぎ、数千里の波涛を無事に生還し、今また幕府の御仁恵を蒙り安楽となった光太夫を羨まない者はなかった。こうして、めでたしめでたしのうちに夢物語は幕を閉じるかに見えた。しかし、著者は、光太夫の領主に宛た公儀からの書状を最後につけ加えることで、読者を鎖国の現実世界に引き戻している。書状には二人は国元へは帰さず、幕府の薬草植場にさしおかれることが記されてあった。

表題と序文で『魯齊亞國睡夢談』は夢物語として提示された。しかし、不思議なことに、テキストには夢に陥る場面も夢から覚める場面もない。だが、テ

クストを注意ぶかく読めば、ロシアを夢空間として提示する様々な仕掛けが組込まれていることが分かる。

#### 4 『魯齊亞國睡夢談』から見えてくるもの

光太夫関係の記録には、『北槎聞略』のように、質・量ともに他の追隨を許さない優れた作品がある。はたして『魯齊亞國睡夢談』は何か新しい世界を提示することができるのであろうか。

『北槎聞略』の世界になくて『魯齊亞國睡夢談』の世界にあるもの、それは日本側やロシア側のナマの記録である。

『魯齊亞國睡夢談』にはロシアからの献上品のリストが示され、日本側の下賜品のリストや小市の遺品のリストも示されている。これにより公儀だけでなく、宣諭使や松前藩も使節に帰国土産をおくっていたことがわかる。また公儀の下賜品のなかには牛や鶏の塩漬けが含まれており、ロシア人の視点になって贈り物を選んでいることが分かる。献上品や下賜品もコミュニケーション手段になりうる。日本とロシアとの贈り物の交換によるノンバーバルコミュニケーションの実態をよく伝えている。ラクスマン来航事件に関連したロシアや日本の記録は、政治的な意味を内包するテキストであり、政治的記述を排除した『北槎聞略』がとりあげなかった文書である。ドキュメントに語らせる方法であり、事実がありのままに提示されている。

ドキュメントである巻之四と巻之五が伝達する内容は、＜冒険譚＞である巻之壱や巻之弐の内容と細部において整合性がなかった。『魯齊亞國睡夢談』は漂流民の体験談とラクスマン来航事件をめぐるひとつの物語というよりは、様々な文書を集積したもので、著者はそれぞれのテキストがそれぞれの声をあげるにまかせている。巻之四と巻之五の原著者は桂川甫周であることが分かっている。巻之三は記録を作成した人が原著者である。巻之壱と巻之弐は著者のオリジナルであるのか、光太夫の話を筆録したものを転写したのか特定できない。いずれにせよ、ここでは著者は『魯齊亞國睡夢談』という表題のネットワーク



でテキストの集積全体を包み込むことで、光太夫生還事件をさまざまな位相において包括的にとらえている。巻之壺と巻之式のあやふやな情報はいわば幕府のとがめを避けるための目つぶしであった。読者は巻之三、巻之四、巻之五と続くドキュメントの連続に目を覚まされる。

そのようなドキュメント集積から見えてくるもの、それは人々の好奇心である。巻之三には小市の遺品53品目が一つ一つ列挙されている。幕府の命をうけて光太夫の話を聞き書きした篠本廉の『北槎異聞』では、小市の妻は、根室まで帰り着きながら病に倒れた夫の死を悲しむあまり「俄に狂気して、狂い死にたりと云」<sup>19)</sup>となっている。実際は、発狂するどころか、『猿猴庵合集 六編』が伝える様に、<sup>20)</sup>小市の遺品を人々に披露して、しっかり小市の法要の費用を捻出していたのである。『魯齊亞國睡夢談』は、小市の遺品にふれ、見物に訪れる人は「日々群参したりとかや」と、群衆が押し寄せた様を伝えている。見知らぬ異境を垣間見させてくれる小市の遺品が人々の好奇心を引き寄せていたのである。

ロシアに対し好奇心を抱いたのは庶民ではなかった。巻之四と巻之五が伝えるく光太夫と磯吉の尋問調書>すなわち、『漂流御覧之記』からは、将軍や幕閣の抑えがたい好奇心がうかがえる。

吉野作造によれば、尋問の主要目的は、第一に耶蘇教に入ったようなことはなかったか、第二に、ロシアの通商希望について何等聞く所がなかったかであった。<sup>21)</sup> これらを吟味してしかるべき沙汰を下すための尋問であれば将軍がわざわざ立ち会わなくてもよかった。寛永十二年の令（異国江渡り住宅在之日本人来候ハ、死罪可申付候）<sup>22)</sup>によれば、海外居住者は帰国すれば死罪になったはずである。巻之四に添付された洋服姿の光太夫と磯吉の姿絵や人物配置図は、鎖国令違反者の事情聴取もさることながら、ロシア装束に身をかためた光太夫と磯吉を観覧して、将軍や諸侯が擬似ロシア体験を味わうという性格のものであったことを暗示している。延々4頁を費やすロシア装束の描写。7時頃始まり、昼食休憩後再開された尋問。27ヶ条にも及ぶ質問。お色直しで上着を着

替えた、いや着替えさせられた光太夫と磯吉。二人を見るべく、「群居た」という幕閣。御簾から隙見する將軍徳川家斉。これらの表現は人々の好奇心の大きさを伝えている。御白州には床几がしつらえてあり、光太夫と磯吉はその上に腰をおろしている。

ロシアは日本の生活習慣とはかけはなれた身体表現をする世界だった。このわずか3ヶ月前、史上初の日露会見の前夜、ラクスマンと幕吏の間で儀式の際の身体表現をめぐり文化摩擦があったことが思い出される。靴を脱いで正座平伏の礼を要求する幕吏に、クラスマンは仰天する。彼は神でもない人間にそんな姿勢をとることはできないと断固拒否し、ロシアにおける儀礼の身体表現である立礼を幕吏にデモンストレーションしてみせる。幕吏は立礼では礼にならないと途方にくれるが、結局ロシア側は椅子に腰をかけ、日本側は畳に正座することで決着がつけられた。<sup>23)</sup> 光太夫を白州にはいつくばらせずに、椅子に腰かけさせ、立礼をさせたのは、日本の儀礼を相対化するロシアの身体表現に、幕府が興味を抱いたからであろう。光太夫と磯吉は鎖国令違反者というよりは異境からの客人としての扱いをうけ、幕閣たちの好奇のまなざしを浴びている。

では、そのような好奇のまなざしは、ロシアのどのような位相にむけられたものであったのか。

巻之壹には絵が八枚ついている。蝦夷周辺の地図が一枚と、エカテリーナ号の絵が一枚、あとはすべて人物の絵である。巻之四にも絵が二枚ついている。二枚のうち一枚は漂民御覧の際の人物配置図で、もう一枚はロシア装束の光太夫・磯吉の姿絵である。これらのイラストはロシアを見つめる人々の好奇心を視覚化したものといっていいい。人々の関心の所在が、ロシア人そのものにあったことを雄弁に物語っている。しかも、被写体となっているのは、異国の珍奇なるものというよりは、普通の人間である。構図も船長が犬と戯れていたたり、役人がのんびりくつろいでいるシーンである。等身大の人間をとらえようとするまなざしが感じられる。

人物図の今ひとつの特徴は日本人の顔とロシア人の顔に際だった違いがみと

められず、同じ人間として造型されていることである。ここで思い出されるのは、ペリーが浦賀に来航した際の黒船騒動である。巷間にあふれる「ペリリ肖像画」では、ペリーは鬼、閻魔、天狗として造型されている。人々は外圧により開国させられたという思いを異類・異形のペリー像にこめたのだろう。この書に描かれたロシア人に異人性の強調が認められないのは、日本とロシアを対立させないロシア観を示唆していると思われる。ラクスマン一行の来航目的が漂流民を送り届けるという人道的なものであったことと、10ヶ月に及ぶ足止め期間中にロシア人と日本人との間に人的交流が芽生え、人間性を伝えることができたことが大きく作用している。

鎖国時代、異国情報に対する幕府の禁令は厳しく、桂川甫周も『魯西亜志』を献上した後はそれを焼却したという。<sup>24)</sup> しかし、外国情報をもとめる人々の好奇心は強く、それは『魯齊亞國睡夢談』の記述からも窺えた。

太陰暦がもっぱら行なわれていた江戸時代に大槻玄沢は、寛政6年11月11日(太陽歴では1795年1月1日)蘭学者たちを家に招いて新年を祝った。その時の様子を市川岳山が「芝蘭堂新元会図」に描いているが、そこには光太夫も描かれている。蘭学者としては、そうそうたるメンバーが参加していることを軽視すべきではないだろう。外国情報を書物を通じて摂取していた蘭学者も光太夫の話に興奮したのであった。

機密文書であったはずの『北槎聞略』ですら、將軍への献上本(正本)を除いても11種の写本が流布し、『漂流御覧之記』に至っては、少なくとも写本54冊が確認できるという。<sup>25)</sup> また『魯西亞國睡夢談』も、管見のかぎり、レーニン図書館以外に市立函館図書館に所蔵されている。この事実、いかに人々が海外情報を渴望していたかを雄弁に物語っている。

ロシアは、日本の社会では考えられないような風俗習慣をもつ異境だった。とりわけ、一介の漂流民が一国の女帝に拝謁がかない、その手に接吻することを許されたという報告は、刺激的な話題であったはずである。日本の身分制社会の常識をくつがえすような、人間関係のありかたであった。

このようなありかたをする世界を記録しておきたいという強い願望が人々の心に宿ったに違いない。幕命や藩命による書物だけがその願望をかなえたのではなかった。だが、幕命や藩命という安全弁をもたない著者にとっては、禁令をかいくぐって異境世界を語るには夢という情報伝達回路が必要であったのであろう。

## 5 終わりに

京都でスパルヴィンにより購入され、ソ連に渡った写本『魯齊亞國睡夢談』は、長い間人目に触れることがなかったが、レーニン図書館でコンスタンチーノフに発見され、日ソ友好の時代気運にのり、ソ連で影印出版された。

『魯齊亞國睡夢談』は、翻訳者コンスタンチーノフが万感の思いを込めて露訳した様に、漫然と書かれた書ではないだろう。著者は危険覚悟であったろう。禁じられた世界情報という対象と著者の記録願望と読者の好奇心と幕府の情報統制という状況が、夢という情報伝達回路を生んだ。夢に託して禁じられた情報を伝達する手法は、その後も『南瓢記』、『戊戌夢物語』など、夢を枠としてもつ小説に受け継がれていく。

『魯齊亞國睡夢談』からは、海外情報を渴望する人々の好奇心とナマのロシア情報を記録しておきたいという著者の熱意が感じられる。危険をおかし著者が記録したものは、ロシア脅威論が生んだ赤鬼の国、赤賊の国という歪んだロシア像とは違って、普通の人々が住むロシアの像だった。

### 注

- 1) 『日本北辺関係旧記目録（北海道・樺太・千島・ロシア）』北海道大学附属図書館編 北海道大学図書刊行会 1990年。
- 2) 原文公刊・翻訳・評論・解説ヴェ・エム・コンスタンチーノフ、監修ソ連科学アカデミー会員エン・イ・コーンラド『魯齊亞國睡夢談』東洋諸民族古書拾遺原文小型シリーズXI モスクワ 1961年 vii頁。
- 3) С. С. Григорцевич, Из истории отечественного востоковедения; Владивостокский Восточный институт в 1899 - 1916 гг. — Советское востоковедение, № 4, 1975, с. 138.

- 4) E. Pinous, Recent Soviet Translation and Studies of Pre-Modern Japanese Literature, Monumenta Nipponika XXXII, 2, 1977, Sophia University p. 235-243. コンスタンチーノフの知り合いであるゴレグリヤド氏に当時のお話をうかがうことができた。
- 5) 『魯齊亞國睡夢談』 vii-viii頁。
- 6) В. М. Константинов, Свидетельства японцев о России XVIII века. — Советское востоковедение, № 2, 1958, с. 76 - 81.
- 7) コンスタンチーノフの経歴については以下の文献を参照されたい。  
 К 60 - летию В. М. Константинова. — Народы Азии и Африки, 1964, № 1, с. 228 - 229.  
 Владимир Михайлович Константинов. — Народы Азии и Африки, 1967, № 6, с. 184 - 185.  
 Н. И. Конрад — В. М. Константинову. — Восток, 1991, № 2, с. 88 - 89.
- 8) コンスタンチーノフの注釈は、桂川甫周著・亀井高孝校訂『北槎聞略』 岩波文庫 1990年の注に全面的に取り入れられているので参照されたい。
- 9) 松平定信著、松平定光校訂『字下人言・修行録』 岩波文庫 昭和17年 165頁。
- 10) 『本土利明 海保青陵』『日本思想大系44』 岩波書店 1970年 70-71頁。
- 11) 彼の名はいろいろに書かれるが、本稿では、晩年の自署に一貫して用いられている「光太夫」により表記する。
- 12) 美作箕作省吾著『坤輿図識』弘化二年(1845年) 卷二 (京都大学附属図書館蔵)
- 13) N.R.アダム 市川伸二訳『遠い隣人—近世日露交渉史—』 平凡社選書149 1993年 37頁。
- 14) 桂川甫周著・亀井高孝校訂『北槎聞略』 岩波文庫 1990年 158頁。但しルビは省略した。
- 15) 杉田玄白著・緒方富雄校注『蘭学事始』 岩波文庫 1959年 20頁。
- 16) 「聞チカヒモ有覧」はおそらく、「聞チカヒモ有覧」の誤記であろう。ちなみに、函館本では「聞チカヒモ有覧」となっている。
- 17) 序文はそれが置かれている位置から判断すれば、卷之壹にしか関係していないかのようであるが、卷之壹と卷之貳は内容的に連続しているので、序文の作用域は卷之壹と卷之貳と考えられる。
- 18) Лаксмана журнал мореплавания в Японию. — Исторический архив. 1961, № 4, с. 117 - 119. 中村喜和「タタミの上の外交交渉—ラクスマン来航201年目の感想—」『日露200年—隣国ロシアとの交流史—』 ロシア史研究会 1993年 24-35頁。
- 19) 篠本廉著・大友喜作解説、校訂『北槎異聞』 北門叢書第六冊 国書刊行会 186頁。
- 20) 山本祐子『猿猴庵合集 六編』—影印と翻刻—『名古屋博物館研究紀要』名古屋博物館 昭和62年。
- 21) 吉野作造著『露国帰還の漂流民幸太夫』 文化生活研究会 大正十三年 16頁。
- 22) 石川良助『徳川禁令考 前集第6』 創文社 1959年 375頁。
- 23) Лаксмана журнал мореплавания в Японию. — Исторический архив. 1961, № 4, с. 139 - 140.
- 24) 林子平著『三國通覧図説』 蝦夷・千鳥古文書集成全十卷 北方未公開古文書集成 第三卷 教育出版センター 昭和60年 56頁。
- 25) 飛鳥井雅道「異境と異界」 1991年5月8日 京都大学人文科学研究所での口頭報告。

写本『魯齊亞國睡夢談』の解読に際しては、平田由美氏に御教授いただいた。また論文執筆の過程では、飛鳥井雅道、木村崇、米井力也、斉藤希史、谷川恵一、平田由美、松田清の諸氏に多々御教示いただくことができた。記して感謝する。

## 討議要旨

平岡敏夫氏より「著者としてどのような人物が想定されるか。また、内容が多岐にわたっているので、複数のものを合成した可能性は考えられないか」との質問がなされた。発表者は「巻一、二の著者は不明。巻三は『通航一覧』などの著作に記載されている信牌や贈答品リストのヴァリエントであるらしい。巻四、五の原著者は、桂川甫周であることが分かっている。全体を編集した著者は、多分蘭学者ではないかと考えている。」と答えられた。相田満氏は「長崎浩斎関係の資料に、桂川甫周、大槻磐水などが出てくる。彼らは一種の人物交流圏を形成しており、頻繁な書簡の往復が認められる。こういったグループが、考証などには関与していたのではないか」と示唆された。また、渦沼潤氏からコンスタンチーノフについて、武井協三氏より挿絵についての質問があった。